

α Mプロジェクト2017

鏡と穴ー彫刻と写真の界面 Mirror Behind Hole – Photography into Sculpture

キュレーター：光田ゆり(DIC川村記念美術館学芸員)

「鏡と穴ー彫刻と写真の界面」 光田ゆり

デジタルデータが写真である。音楽、文章、グラフィック、映画でもある。統一的に一次元のそれらデータをモニターの外に連れ出そうとするとき、つまり実体物に変換するとき、データは彫刻化される。実体をもたないデータをどのような機材、素材に接続してリアル化させるか、彫刻化の過程こそ問われている。

わたしたちがフィルムと古典印画法にこだわり、レコードを収集し、書道を見直し、活版に凝り、国際展で16ミリフィルムのインスタレーションを行うのは、単なるノスタルジーではないだろう。自分たちが物体としての身体を備えている以上、データは彫刻化され触知可能な実体になることが必要だと、気づかされたのである。これまで物体感を見過ぎがちだったレコードや活版は、今となっては圧倒的に彫刻的である。すでに断ち切られた制作の起源を訪ね、かつての彫刻化の技術を学ばねばならない。

写真メディアは実体物をデータ画像に変換する媒介者として、汎用され世に遍在している。そのデータは多様な出力法によりどのようなものにも化身できる。つまりデジタル写真はあらゆる物質の表面上に憑依可能な、【型／mold】としてある。もともと、アナログのフィルムにも【型／mold】の要素はあったのだが、3Dプリンターがデジタルデータをシームレスに彫刻にするにいたり、写真の【型／mold】性は確定されている。

【型／mold】は穴である。そこにどんな物質も受け入れる。一方で写真は鏡だと言われてきた。現実物を写し出して、自らの実体は見せない、反射率100%の鏡だと。今や写真は【型／mold】という穴でもある。実体物の写真像とありもしないものの像をデータ上で区別しない以上、この穴には底がない。反射率0%の穴である。穴と鏡が写真であるとき、そのあいだに彫刻が出現する。

もとより彫刻と写真はつながっていた。絵画の批判に画中画が有効なように、彫刻を批判する彫刻を考えるとしたら、それは写真になる。彫刻メディアを粗上に上げるには、ひとつの彫刻を今ここにある現実性のなかに、特定の場と時間のなかに見なければならぬ。つまりそれは写真である。彫刻と写真が接続されるとき、伝統彫刻のモニュメンタル性と普遍性のコーティングは剥がれ、傷つきやすくとらえがたい現代彫刻の生な面が露出する。それを支えられるのもまた写真しかない。

そのことを知っていたコンスタンティン・ブランクーシは、アトリエで自分の彫刻群を魅力的な写真にした。ブランクーシはモニュメント以後の、移動可能な彫刻の作家であるから、生きた時間のなか特定の視点ごと自作を提示したかった。彼に見えているとおりの彫刻空間を保存、提示するためには、写真が必要である。空間体験としての彫刻。それはつまり写真なのだ。

ブランクーシはまず石を掘ってかたちのアイデアを探す。たどりついたかたちを、ほぼ同寸の数種の石に彫り、ついにブロンズに鋳造する。ブランクーシ彫刻のかたちにとって、素材の交換は可能らしい。かたちのアイデアは現実の物質に対して【型／mold】なのだ。その最終形は、石彫から【型／mold】を作ってブロンズ鋳造、鏡面磨き仕上げになる。彼のかたちのアイデアは、鏡として実体化する。周囲を映し込む自身の鏡面彫刻を、ブランクーシは鋭い反射光とともに写真に撮っている。その時、彫刻と写真のどちらが鏡だろうか。彫刻のかたちと写真装置のどちらが【型／mold】=穴になるだろうか。

光を反射しない見えない穴と、反射像だけを見せて自身を見せない鏡が、向かい合っている様を思い浮かべたい。現代写真と彫刻のありかをそこに試み、今年度のα M展の基点である。

会期

- 会期1:2017年4月8日(土)~5月13日(土):高木こずえ
- 会期2:2017年5月27日(土)~7月1日(土):澤田育久
- 会期3:2017年7月15日(土)~8月26日(土):水木堡(8/13~8/21 夏期休廊)
- 会期4:2017年9月9日(土)~10月14日(土):小松浩子
- 会期5:2017年10月28日(土)~12月2日(土):石原友明
- 会期6:2017年12月16日(土)~2018年2月3日(土):柄澤健介(12/24~1/8 冬期休廊)
- 会期7:2018年2月17日(土)~3月24日(土):野村在

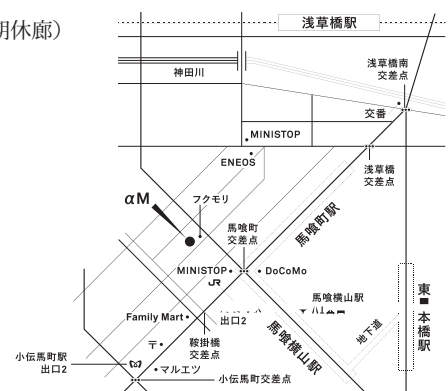
会場:gallery α M ギャラリーアルファエム

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F
tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166 日・月・祝休 11:00~19:00
<http://gallery-alpham.com>

gallery α Mは、質の高い表現と可能性を有するアーティストと、斬新な価値を発信できるキュレーターの活動の場として、武蔵野美術大学が運営するノンプロフィットギャラリーです
主催:武蔵野美術大学 運営:武蔵野美術大学α Mプロジェクト運営委員会
デザイン:山田拓矢

■本展に関するお問い合わせは下記までお願いいたします■

gallery α M ギャラリーアルファエム
保谷香織(ほうや・かおり) hoya@musabi.ac.jp
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F
tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166



交通アクセス

- 都営新宿線[馬喰横山] A1出口より徒歩2分
- JR横須賀線・総武快速線[馬喰町]西口2番出口より徒歩2分
- 日比谷線[小伝馬町]2、4番出口より徒歩6分
- 都営浅草線[東日本橋]より徒歩6分

α M2017 ゲストキュレーター プロフィール

● 光田ゆり(みつだ・ゆり) 美術評論家

兵庫県西宮市生まれ。京都大学文学部卒業。専門は近現代美術史および写真史。

著書に「Words and Things: Jiro Takamatsu and Japanese Art 1961-72」(Daiwa Press, 2012年)、「高松次郎 言葉ともの—日本の現代美術1961—72」(水声社, 2011年)、「写真、芸術との界面に 写真史 一九一〇年代—七〇年代」(青弓社, 2006年) (日本写真協会学会芸賞)、「美術批評」誌とその時代」(Fuji Xerox Art Bulletin, 2006年)、「野島康三写真集」(赤々舎, 2009年)。

主な展覧会企画に「美術は語られる—評論家・中原佑介の眼—」(2016年)、「The New Word to Come 日本の写真と美術の実験」(2015年)、「ハイレッドセンター・直接行動の軌跡」(2013~14年)、「岡本信治郎 空襲25時」(2011年)、「野島康三 作品と資料」(2009年) (美術館連絡協議会優秀カタログ賞)、「中西夏之新作展 絵画の鎖・光の森」(2008年)、「大辻清司の写真 出会いとコラボレーション」(2006年)、「安井仲治写真集」(共同通信社, 2004年) (倫雅賞)。

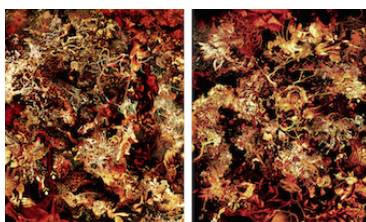
α M2017 作家 プロフィール (会期順)

● 高木こずえ (たかぎ・こずえ)

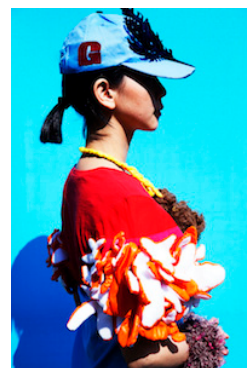
1985年長野県生まれ。2007年東京工芸大学芸術学部写真学科卒業。2015~2016年公益財団法人ポーラ美術振興財団在外研修員としてアメリカに滞在。現在、長野県在住。主な個展に2014年「琵琶湖」(キヤノンギャラリーS、東京)、2013年「琵琶湖カレイド」(AKAAK、東京)、2012年「高木こずえ写真展-SUZU-」(諏訪市美術館、長野)、2011年「SUZU」(ホクト文化ホールギャラリー、長野)、「SUZU」(TARO NASU、東京)、2010年「第35回木村伊兵衛写真賞受賞作品展高木こずえ「GROUND」「MID」」(コミカミノルタプラザギャラリーC、東京)など。主なグループ展に2015年「豊川ならではの現代美術」(豊川市桜ヶ丘ミュージアム、愛知)、2014年「諏訪 - この土地と人へのまざざし - 」(諏訪市美術館、長野)、2011年「ネクスト: 信州新世代のアーティスト展 2010」(長野県伊那文化会館、ホムト文化ホール(長野県県民文化会館)、長野)、2009年「VOCA展2009現代美術の展望 - 新しい平面の作家たち」(上野の森美術館、東京)など多数。<http://cozuetakagi.com/>



高木こずえ
「insider」
2006年 | lambda print with acrylic



高木こずえ
「ground」
2009年 | type C print



高木こずえ
「琵琶湖」
2014年 | inkjet print

● 澤田育久 (さわだ・いくひさ)

1970年東京生まれ。金村修ワークショップ参加。自身の作品の発表の場として2012年~2013年「The Gallery」及び2014年~現在「ALTERNATIVE SPACE The White」主催。主な個展に2011年「closed circuit」(TOKI Art Space, 東京) 2012年11月~2013年10月までの1年間、毎月新作による連続展「closed circuit, monthly vol.1-vol.12」(The Gallery, 東京) 2016年「serial exhibition」(The White, 東京)など。主なグループ展に 2011年「Public Image vol.1~vol.5」(vol.1 神奈川県民ホール, 横浜 vol.2~vol.5 アートフォーラムあざみ野, 横浜) 2012年「Repeat After Me vol.1」(The Gallery 東京)など。スライドショーに2011年「anti drawing 1,2」(横浜美術館レクチャーホール, 横浜) 2015年 東京国際写真祭(ART FACTORY 城南島, 東京)など。

<http://www.sawadaikuhisa.com>



澤田育久
「closed circuit, monthly vol.12」2013年
(The Gallery, 東京)



澤田育久
「closed circuit, monthly vol.10」2013年
(The Gallery, 東京)



澤田育久
「closed circuit」2016年

●水木塁 (みずぎ・るい)

1983年京都府生まれ。2016年京都市立芸術大学大学院美術研究科メディア・アート専攻(博士後期課程)修了・博士(美術)学位取得。主な展示に2016年「NEO-EDEN 新伊甸園」(蘇州金鶏湖美術館、蘇州、中国)、2015年「都市—Cityscapes/Residences」(kanakawanishi Gallery、東京)、「STEP OUT! New Japanese Photographers」(IMA Gallery、東京)、「PARASOPHIA 特別連携プログラム / still moving」(元崇仁小学校、京都)、2014年「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD NEW VISIONS #1」(G/P gallery、東京)、「NIPPON NOW Junge japanische Kunst und das Rheinland」(E.ON、ドイツ)、2013年「flowing urbanity」(ART68、ケルン、ドイツ)、2012年「かげうつし—写映・遷移・伝染—」(@KCUA、京都)、2009年「now here , nowhere」(京都芸術センター、京都)、2007年「水の情景-モネ・大観から現代まで」(横浜美術館、神奈川)など多数。2017年トーキョーワンダーサイト二国間交流事業プログラム派遣クリエイターとしてメルボルンに滞在予定。<http://mizukirui.net>



水木塁
「untitled SK8 park」
インクジェットプリント、アルミニウム、ロール加工
2016年 蘇州金鶏湖美術館



水木塁
「Wall works #babies and cars」
インクジェットプリント
2014年 京都市立芸術大学構内 新研究棟



水木塁
「Pool #そら豆02」
カンヴァスにグリップテープ、耐水性チョーク
2015年

●小松浩子 (こまつ・ひろこ)

1969年、神奈川県生まれ。2006年に写真を始め、2009年に幅約1メートルの印画紙で壁面全体を覆った作品で初個展を開催。以降、都市近郊にある屋外に設けられた建設資材や廃材の集積場での撮影を継続しながら、壁面のみならず、床も含めた空間全体を膨大な量のモノクロ写真で埋め尽くすインスタレーションを発展させている。2010～2011年には自作の発表の場として、プロイラースペースを主催、毎月個展を開催した。主な個展に2015年「成分家族」(トキアートスペース、東京)、2014年「二重拘束」(ギャラリーQ、東京)、2013年「毒皿方針」(photographers' gallery, KULA PHOTO GALLERY、東京)、2009年「チタンの心」(ギャラリー山口、東京)など。主なグループ展に、2016年「RESET II and Futurism」Priska Pasquer(ドイツ、ケルン)、2015年「7 Palaces, 7 Precarious Fields」Zephyr(ドイツ、マンハイム/Fotofestival MannheimLudwigshafen-Heidelberg)など。

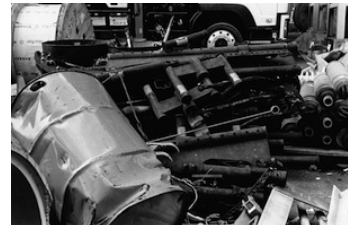
<http://komatsu-hiroko.com/>



小松浩子
「連続特殊訪問」 2016年
Priska Pasquer(ドイツ、ケルン)



小松浩子
「生体衛生保全」 2015年
Zephyr(ドイツ、マンハイム)



小松浩子
「生存芸術家」 2016年
The White(東京)

●石原友明 (いしはら・ともあき)

1959年大阪府生まれ。1984年京都市立芸術大学大学院修了。主な個展に2016年「拡張子と鉱物と私。」(MEM、東京)、2014年「透明人間から抜け落ちた髪と透明さ」(MEM、東京)、2004年「i [the imaginary number]」(西宮大谷記念美術館、兵庫)、1998年「美術館へのパッサージュ」(栃木県立美術館、栃木)など多数。主なグループ展に2015年「still moving」(元崇仁小学校、京都)、2010年「Trouble in Paradise—生存のエシックス」(京都国立近代美術館、京都)、2007年「Vanishing Points - Contemporary Japanese Art」(ニューデリー国立近代美術、インド)、2006年「Rapt! - 20 Contemporary Artists from Japan」(モナシュ大学美術館、メルボルン)、2000年「Counter - Photography」(モスクワ芸術センター、モスクワ、ロシア民族博物館、サンクトペテルブルグ、他)、1992年「彫刻の遠心力」(国立国際美術館、大阪)、1988年「ヴェネツィアビエンナーレ・アペルト'88」(アルセナーレ、ヴェニス)など多数。



石原友明
「盲目のクライマー／ライナスの散歩」
(中原浩大との共同制作)2010年 | ラウンベニヤ



石原友明
「I.S.M.-corpus 16-01」
2016年 | 700×610×820mm
発泡スチロールに胡粉、アクリル



石原友明
「scotoma」 2003年
真空、ガラス他ミクストメディア

●柄澤健介 (からさわ・けんすけ)

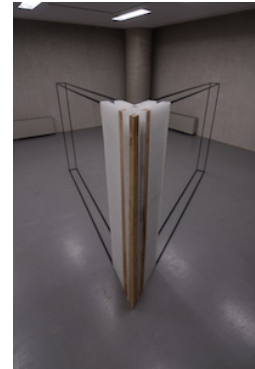
1987年愛知県生まれ。2011年金沢美術工芸大学美術科彫刻専攻卒業。2013年金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科彫刻専攻修了。主な個展に2015年「Kensuke Karasawa 2012-2015」(Star Gallery、北京)、2014年「Pale Light」(山鬼文庫、石川)、2012年「変わらぬ地平」(Take Ninagawa、東京)、「Penetrate」(プラザギャラリー、東京)、主なグループ展に2016年「[DUE MONDI] Kensuke Karasawa and Francesca Rivetti Curated by Fantom」(VIASATERNA、ミラノ)、2015年「OBJECTS IN MIRROR ARE CLOSER THAN THEY APPEAR」(The Three Konohana、大阪)、2014年「虹の麓 -反射するプロセス-」(名古屋市民ギャラリー矢田、愛知)、「Hazing Kyoto Invitational Group Exhibition」(Star Gallery、北京)、2013年「アートアワードトーキョー丸の内2013」(行幸地下ギャラリー、東京)、「trade parade -等価交換の条件-」(旧北陸銀行間屋町支店、石川)など。



柄澤健介
「変わらない地平」2016年
木、蠟、胡粉 | 28x77x31cm



柄澤健介
「視点の深度」2016年
24x75x350cm | 木、蠟



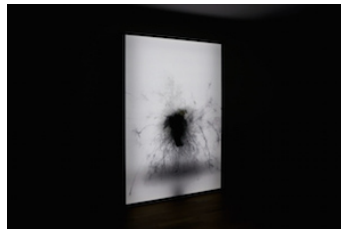
柄澤健介
「crossing」2013年
木、蠟、鉄 | 180x300x360cm

●野村在 (のむら・ざい)

1979年生まれ。2009年ロンドン大学ゴールドスミス校・MFA修了。2013年武蔵野美術大学博士課程修了。主な展示に、2016年ハンブルグ・アーティストレジデンス、2016年あいちトリエンナーレ、2015年“Continuous Temporality”-vol2” (COEXIST-Tokyo Gallery、東京)、2013年 “additional fugitive” (アルマスギャラリー、東京)、2011年 アートコートフロンティア2011 (アートコートギャラリー、大阪)、2009年 “GROUP/GROPE” (エリア10、ロンドン) 2007年 “MULTIPLE INTIMACY” (イスタンブール、トルコ) など。<http://www.nomurazai.com/>



野村在
“Untitled”
(packaged diameter 80m of firework display)
2016年 | 強化ガラス、鉄、導火線、火薬



野村在
「Lightfigure 170 seconds
(60seconds+62seconds+48seconds)」
2016年 | ダイレクトプリント、アクリルレイヤー



野村在
「Japanese Breakfast」
2015年 | ラムダプリント